

○ 第8回「ハートミーティング」 意見交換の内容について

---

市長 日ごろから、活発に活動してくれていることをうれしく思う。

メンバー 本日は、市長と活発に意見交換を行いたく参加させていただいた。

京都市役所技術士会は、本市土木技術職員のうち、技術士、技術士補の有資格者及び技術力向上を目指す職員を中心に構成されている。技術力の強化を図り、もって京都市の発展に貢献することを目的として活動を行っている。

活動内容については、分野ごとにいくつかのワーキンググループ（以下「WG」という。）が存在するが、人財育成 WG はそのうちの一つであり、最も活発に活動しているグループである。若手技術者の育成を大きな目標として掲げ、必要なスキルを身につけ、やりがいを持って業務に携わり、技術者として明確な目標を持ち、生きがいを自ら見出していくことを狙っている。

その一環として、「技術士」資格の取得を奨励・援助しており、勉強会を行うことで、技術力の向上と明日の技術職を担う意気込みを育てていきたいと考えている。

WG名称は、あえて「財」の字を使用している。人は「財産」であるという思いからである。

活動内容は、10月の一次試験に向けて、6月にガイダンスを実施し、前年度の合格者が講師となって、8月から10月にかけて勉強会を行っている。また、3月には合格祝賀会を開催し、先輩技術士から若手へ、苦労話や失敗談を交えながら、「生きた技術」の継承を図っている。

私は、経験と技術の豊富な先輩にあこがれ、自分も技術力を高め、物事の本質を見極める力をつけたいと思った。そして今度は、そうした思いや技術力を若い人たちにも持ってほしい、伝えたいと思う。

今は私が代表を務めているが、メンバーの中から自然に次のまとめ役が出てきてくれるはずである。

市長 前年度の合格者が講師となるところがいいね。若手を積極的に登用するシステムは参考にしたい。

メンバー 入所して最初の5、6年間は与えられた業務を吸収するだけで精一杯だったが、経験を積む中で前例主義的に業務をこなすだけでは多様に変化する市民ニーズに答えられないのではないかという思いが生まれてきた。また、「不祥事根絶」をマニフェストに掲げなければならない現状には市職員

としてとても悔しい思いがあった。これらがきっかけとなり、自己研鑽を目的に始めた技術士資格の勉強を通じて、技術士倫理を持って業務に携わることが大切であると気付いた。そして、それを日々意識することで、業務の深みと面白みが増してきた。こうした経験を、WGに参加する後輩に伝えられればと考えている。今後も日々の経験を無駄にすることなく一つ一つの業務を大切に、これからの道州制といった地域力を問われる時代で生き残るために、建設行政から京都の地域力を発信できるよう貢献していきたい。

市長 意欲があって素晴らしい。

メンバー 財政状況が厳しい中、お金を使わないで何ができるのか、ということの日ごろから考えている。

また、市役所は対応が遅く、改善も期待できないという半ばあきらめの声を市民からよく聞く。一方で、スケジュールをきちんと説明すると満足される市民もいる。事務職、技術職にかかわらず、業務をきちんと市民に説明するスキルが求められるのではないかと。

現場では、市民の声から、瞬時に問題、課題を把握して原因と対策を立て、予算を出来るだけ抑えてより効果のある対策を提案し、また、それを市民の方に納得いただけるように平易な言葉で説明することが求められている。

技術士試験では、課題に対する解決策の立案が試験問題として出題されている。私は、普段から意識して、市民といっしょになって問題解決に取り組んでいきたい。そして、その取組を他の職員にも広げていきたい。

市長 そのとおり。日々の業務がケーススタディーであり、それを踏まえて対応力を身につけてほしい。

メンバー 市役所に来られる業者の担当者は、土木施工管理技士や技術士などの資格を保有しているだけでなく、人物的にも素晴らしい方が多い。自分もこの方々のようにになりたい。市役所では高いスキルを持つベテランの方が大勢退職され、厳しい状況ではあるが、中堅の私たちがベテランの方と若手の橋渡しができればと思う。

平成 20 年度に、土木施工管理技士の資格を取得した。技術力を向上させ、京都市の発展に貢献したい。

市長 素晴らしい実践を重ねていただいている。さらに、今、経験していることがもっともっと社会に貢献できないか、ぜひ検証してほしい。ただ単に経験しているだけでは本当にもったいない。

メンバー 市民には、政策的、技術的なことを簡単な言葉で伝えることが大事。技術者であると同時に、建設行政を理解していただくための営業マンであるという、両方の役割を担うことが自分の置かれている現状であると思う。また、土木行政に関心を持っていただけるように技術力を身につけたい。市民に建設行政をもっと理解してもらえれば、要望も洗練され、またその効果を市民にフィードバックできるのではないか。

メンバー 業者への的確な指示や市民への十分な回答ができないことに自分の力不足を感じ、専門分野やそれ以外の広い知識を身につけたいと思い、WGに参加している。

私は、ハイヒールで歩きやすいまちづくりを目指している。そうすれば全ての人が歩きやすくなるはず。同じ補修でも、お金をかけず少しの工夫で（例えば歩道の勾配を緩やかにするなど）効果が全然違ってくる。コンサルに言われたままにするのではなく、京都のことを一番知っている我々から提案していかなければならない。技術士の試験勉強をすることで紙の上の知識を現場に生かしている。

市民のニーズに corres 応するためには、現場の実情に即した知識が必要である。紙の知識を現場に生かしたい。

市長 「紙の知識を現場に」。これはいいキーワードですね。

メンバー 技術士には公共利益の確保のために、市民に対してその事業の必要性を具体的、技術的、政策的に説明する役割がある。技術力を磨き、資格をとること、これは公務員技術者の仕事の一部ではないだろうか。何かをした後の説明責任はもちろんあるが、土木技術者は何かをする前に、それをするるとどのような問題が発生し、どのような効果があるのか、費用に対する効果を常に考える癖がついている。このような感覚や考え方は政策決定段階にも必要であると思う。理想を持つことは大切だが、理想を現実に実行することがさらに大切である。そのためにも、現場の声は政策に反映されるべきである。たくさんの土木技術者がもっといろいろな部署で活躍できればいいと思う。

メンバー 私たちは技術力を高め、市民サービスを向上させたいと思っているが、市長は技術力をどのように生かせばよいとお考えか。

市長 京都市に採用される人は優秀である。ただ、公務員は自己の能力開発のために投資をしない傾向がある。民間企業であれば資格を取るため、お金と時間と心も使っている例が多い。秘書担当となったある市職員は、私の知らない間に自分で秘書研修を受け、日程の取り方や座席の座り方など秘

書業務に関する勉強をしていた。ある時は、東京駅で電車を降りた直後に電話をしてきた。どこからか見ているのではないかと思うぐらいである。

京都市にも知識を持った人、志を持った人がたくさん入ってきてきている。ただ、入ってからいい仕事ができているか、職場で人が育っているか。更に努力が必要と思う。

皆さんには、「知識（学識）」・「見識（倫理観）」・「胆識」、この3つをぜひ身につけてほしい。この3つがそろってこそ、人の心に火をつける力、人を納得させる突破力が生まれてくる。

事前説明用の資料を昨日読ませてもらった。今日の話も聞き、皆さんはよくやってくれていると感じる。グループ活動は徐々に低調になっていく傾向があるが、皆さんは、昨年合格した者が講師をするという形をとって常に活力がある仕組みになっており、また、職員研修センターが行う研修だけではなく、自発的に行っているところが素晴らしい。「京都のまちから全国に発信する」という意欲にも感動した。

技術士だけではなく、職員全体にも、このような仕組みやきっかけづくりができれば、仕事に充実感、そして、人生に充実感が生まれてくる。

また、仕事での経験がそのまま専門性を高めることにもつながり、結果として市民に信頼されることにもつながっていく。

市民に安心していただけるよう、「末端」の職員として活動しているという話があったが、「末端」ではなく「最先端」の職員と言ってほしい。「地域主権」時代の中で、基礎自治体の職員である皆さんこそ、第一線で市民といっしょに未来の京都をつくっていくのだから。

メンバー WG はただ資格取得を目的としているだけではなく、日々の業務についても相談しており、WG の先輩の助言が手助けとなり、次に生かすことができている。ものづくりをする仕事をしている中で、市民の考えや意見を聞かずして市民が期待するものはできないと思っている。

市長が「共汗」と言われるが、私も「共汗」することに「共感」している。

自分が関係した事業は必ず喜ばれたいと思っているので、単に構造物をつくるのではなく、何か地元の方と考えて工夫をしたいと思っている。しかし、人が足りず現実にはもっと地元に来てほしいと言われている状態なので、選択と集中が必要であると感じている。

また、私は北大路橋などのようなアピールもいいと思う。皆でいっしょに意見を出しあい、考えることで、何かを成し遂げることができると思う。

土木技術とともに組織を変えていきたい。

メンバー 技術士の勉強をして感じたのは、技術者は専門的なことだけでなく、大きな視野を求められているということ。技術力とは専門分野を知っているだけでなく、その人の人格そのものを言うのである。技術力を生かして、他の分野の業務を行ってみたい。例えば観光など。どこの部署でも、技術職の職員はやっていけるのではないかと考えている。技術職の職員が政策形成段階からその業務に携わり、また違った観点からの意見を出せば、面白いのではないだろうか。働きたいと思うところで働いてみたい。

市長 FA 制度の活用もその一つである。

また、「共汗」に「共感」してくれたことは嬉しい。それと、もう一つのキーワードは「融合」である。

今は縦割りや二重、三重行政が問題。技術職と事務職は融合していかなければならない。

市民の現場でこんな話を聞いた。「社会福祉士や民生委員、少年補導員など色んな方々がいる中で縦割りになっている。ところが、融合したグループをつくったら、地域全体のことを考えるようになった」と。

理系ばなれと言われているが、民間の方ともよく話すのだが、日本の企業のトップで理系の人はい少ない。欧米では大勢いる。これでは理系離れが進むはずである。一方で、理系の人でも自分の狭い専門ばかりにこだわる傾向が日本にはあり、会社の幅広い経営力に関心が浅いと指摘もある。両方の責任ではないかとの意見だ。

あらゆる力を融合をしていかなければならない。技術職は技術職の世界に閉じこもらないことが大事と思う。それを皆さんが実践されていて心強い。

メンバー ゼネラリストやスペシャリストとかよく言われるが、私たちは得意分野を持ちつつも（スペシャリスト）、行政マンとしての幅広い視点を持ちたい（ゼネラリスト）と考えている。

市長 WGの仕組みを他にも浸透させたいですね。

メンバー いい仕組みがあっても、やる気のある人が集まらないと意味がない。京都市役所にはいい人財は大勢いると思うので、発掘することが大事だと思う。

市長 嬉しいことは最近、土木事務所やまち美化事務所に対する市民の評判がいいこと。

「丁寧に対応してくれる」、「すぐに来てくれる」とよく言われる。

メンバー 公務員技術者に市長が求められることはなにか。

市長 政策実現能力とスピード感。

笑顔，親切，ていねい，テキパキに加えて，実行力が問われている。先延ばしするのではなく，未来の京都のために，責任を持って，実行することが大事。

京都は特に難しい面があると言われるが，制度の限界にチャレンジしてほしい。もし，制度の限界があれば改革してほしい。

トヨタ自動車の張さん（現会長）がこう言っていた。

「現場で，“何故？”を5回言う。これがカイゼンにつながる」と。

部署を超えて，融合する。このWGに事務職などの職員が入るともっと面白くなる。これからはぜひ頑張してほしい。

以上